

小学校以降の 学びの土台となる 幼児期の生活と経験とは？

ベネッセ次世代育成研究所は、2012年1~2月、年少児~小学1年生の子どもをもつ母親5,016名に「子どもの学びの芽生えと、母親の関わり・小学校に向けての意識」などについて調査を行いました。この調査結果から今回は「幼児期に育てておきたい学びに向かう力」についてご紹介します。園から家庭への情報提供の材料のひとつとしてぜひご活用ください。

引用・転載時のお願い 本調査の結果を引用される際には、調査名称を記載してください（例：ベネッセ次世代育成研究所「幼児期から小学1年生の家庭教育調査」(2012)）。

園から小学校の移行期に 子どもがスムーズに「学び」に向かうために



東京大学大学院教育学研究科教授
秋田喜代美

あきた・きよみ

東京大学大学院教育学研究科教授。日本保育学会会長。専門は保育学、発達心理学、教育心理学、教師教育。著書に、『保育の心もち』『保育のおもむき』（いずれもひかりのくに）など。今回ご紹介する調査の監修者でもある。

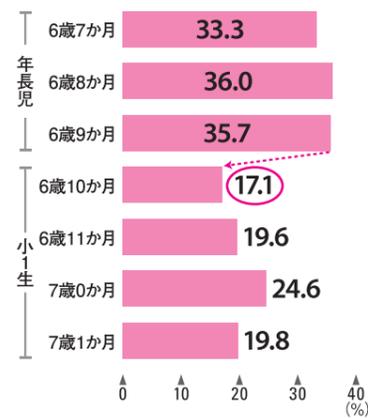
幼児期に育みたい 「学びに向かう力」

今回の調査では、幼児期に大切なこととして「生活習慣」「文字・数・思考」に加え、「学びに向かう力」の重要性が明らかになりました。「学びに向かう力」とは、自分の気持ちを言う、相手の意見を聞く、物事に挑戦する、自分の気持ちを調整するなどの力で、生涯にわたる学びの基盤になる力を指します。「生活習慣」「文字・数・思考」「学びに向かう力」の3つは相互に関わっていることもわかりました。

調査結果で気になったのが、「学びに向かう力」のひとつである「人に自分の気持ちを伝えたり、相手の意見を聞いたりすることができる」が、小学校入学を機に下がっていることです（図1）。これは、環境が大きく変わって子どもがうまく対応できない場合があるからかもしれません。さらに「小学校に入ったら、こうあってほしい」という保護者の期待が大きいと、子どもの能力を実際より低く評価してしまうこともあるでしょう。

そこで園では年長児の終盤で、子どもの気持ちの安定と自信を育む

図1 人に自分の気持ちを伝えたり、相手の意見を聞いたりすることができる(とてもあてはまる)



※注1：2012年1月時点で何歳何か月だったかを割り出し、各月齢ごとに「とてもあてはまる」と回答した割合。

ポートをする必要があります。子どもは自分に自信をもてれば、環境が変化する中でも自分を主張し、自分をコントロールする余裕をもてるのです。

生活習慣が定着している子どもは 「学びに向かう力」が高い

図2-1 物事をあきらめずに、挑戦することができる(年長児)

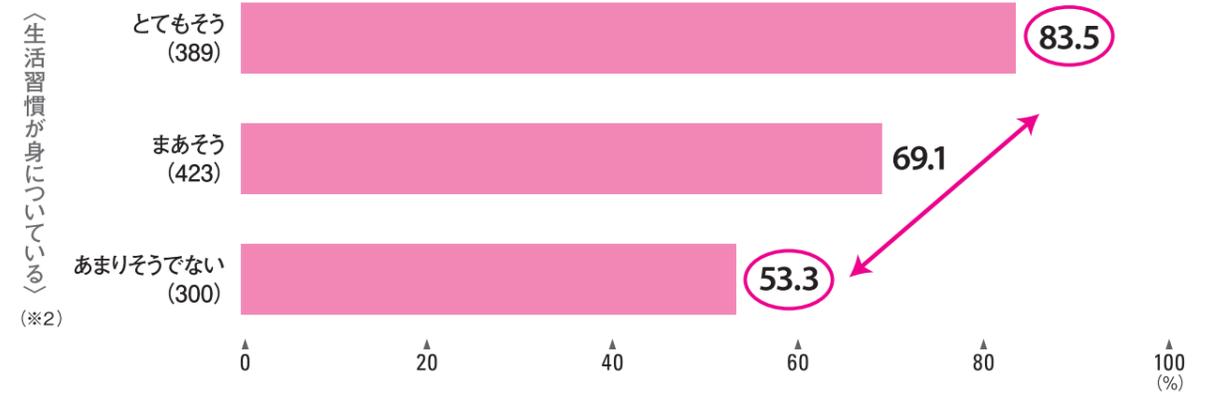
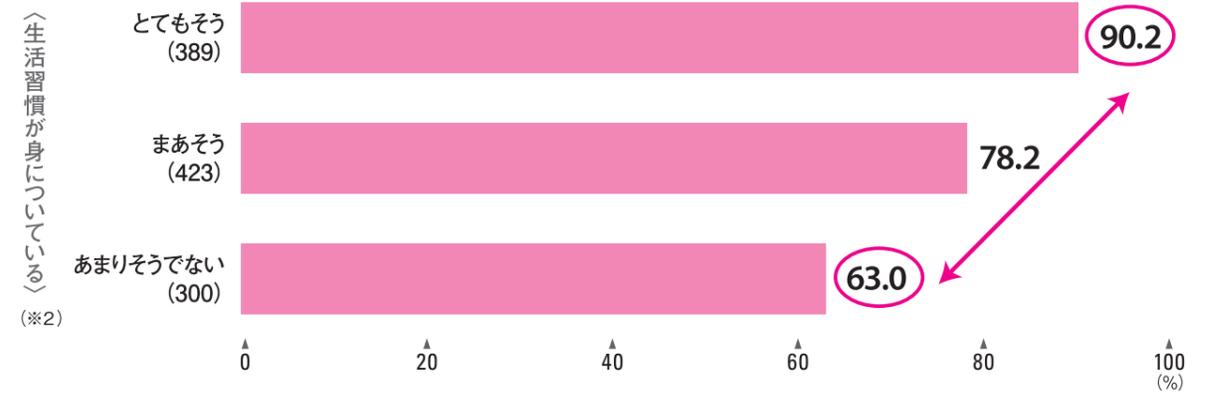


図2-2 人の話が終わるまで静かに聞ける(年長児)



※1：()内はサンプル数

※2：生活習慣について「夜、決まった時間に寝ることができる」「脱いだ服を自分でたためる」「食事が終わるまで、席に座ってられる」「好き嫌いをなく食事ができる」「1人でトイレでの排泄、後始末ができる」「まわりの人に「おはよう」「さようなら」「ありがとう」などのあいさつやお礼を言える」「家で遊んだ後、片付けができる」の7項目について、「とてもあてはまる」を4点、「まああてはまる」を3点、「あまりあてはまらない」を2点、「ぜんぜんあてはまらない」を1点として算出し、平均点を3区分した。すべて回答した人のみ分析した。

★年長の段階で生活習慣が身につけている子どもは、そうでない子どもよりも、より「物事をあきらめずに挑戦することができる」「人の話が終わるまで静かに聞ける」傾向にあることがわかりました（例えば生活習慣が「とても」身につけている子ども

では「物事をあきらめずに挑戦することができる」割合が、83.5%ですが、「あまり」身につけていない子どもでは53.3%でした）。幼児期に生活習慣を身につけることは「学びに向かう力」に深く関わっていることがわかります。

秋田先生の解説

なぜ生活習慣と「学びに向かう力」が関連しているのか、「片付け」を例に、このデータを説明してみましょう。片付けは、「次に使いやすいように工夫する」「他の人が使いやすい状態とはどんなことを考える」といった見直しをもつことが必要です。また、みんなの役に立ちたいという気持ちや、自分をコントロールする力も関わってきます。これらは、

自分の行動を調整し、見直しをもつ力となり、学びに深く関係してきます。

きちんとした生活習慣を通して、見直しのある行動や時間の管理ができるようになることで、学びに向かう力も育っていくと考えられます。

幼児期に集中して遊ぶなどの機会が多いほど、小1で家庭学習に向かう力が高い

図3-1 机に向かったら、すぐ勉強にとりかかる (小1生)

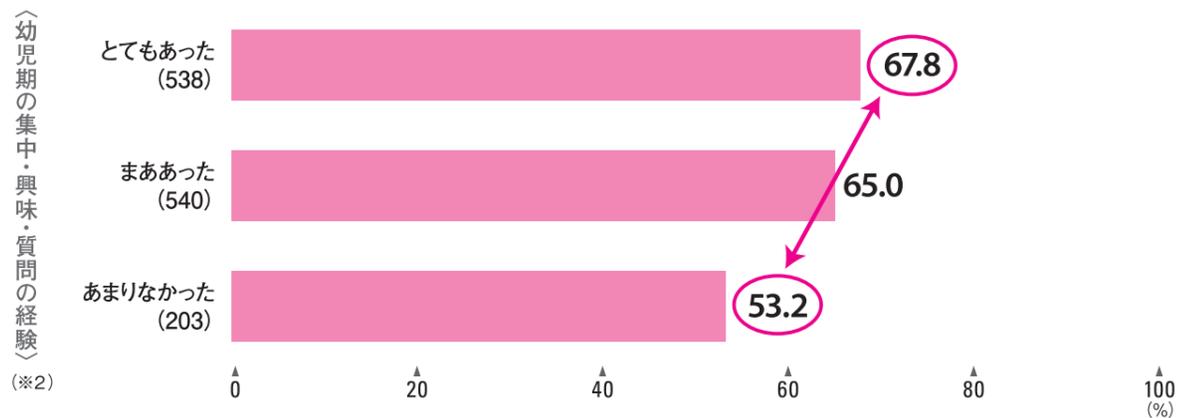
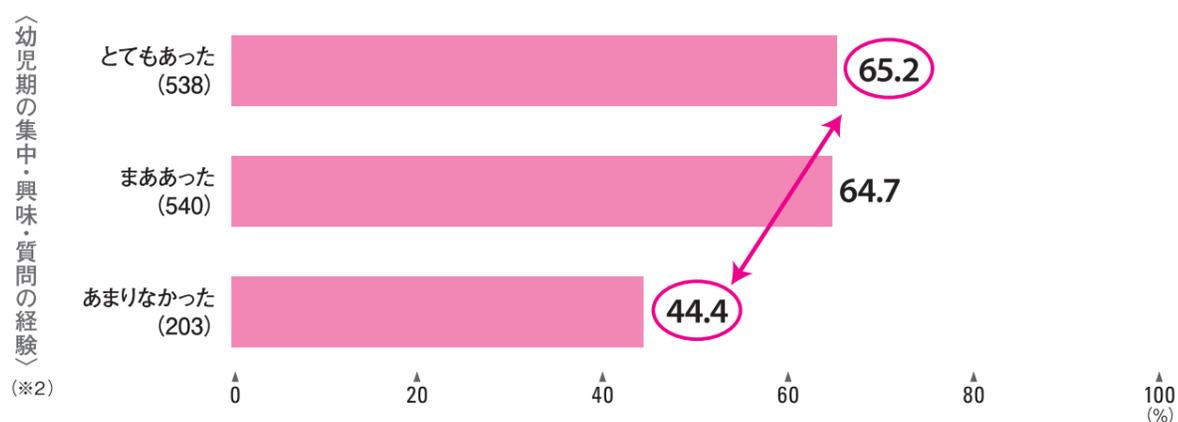


図3-2 勉強が終わるまで集中して取り組む (小1生)



※1: () 内はサンプル数

※2: 幼児期の集中・興味・質問の経験について: 幼児期の学習準備に関する3項目「好きなことに集中して遊んでいた」「生き物や植物に興味をもっていた」「わからないことについて、まわりに質問していた」について、「とてもあてはまる」を4点、「まああてはまる」を3点、「あまりあてはまらない」を2点、「ぜんぜんあてはまらない」を1点として算出し、平均点を3区分した。すべて回答した人のみ分析した。

★幼児期に、好きなことに集中して遊んでいた、わからないことをまわりに質問したりするなどのことが「とてもあった」子どもほど、小1生で、勉強が終わるまで集中して取り組んだり、机に向かったらすぐ勉強にとりかかったりするなど家庭学習に向

かう力が高い傾向にあることがわかりました。幼児期に集中したり、興味をもったりするなどの経験をするのが、小学校での学習の取り組みに関連していることがうかがえます。

秋田先生の解説

このデータから分かるのは、幼児期に遊びに没頭し、集中したり興味をもったりする体験が、小学校の授業だけでなく家庭学習に集中する力に関わることです。活動に没頭して深く考えるという行為は、遊びであっても学習であっても同じことなのです。そのような力が育っていないと、学習時間が長くても集中力に欠け、学習効果も低くな

てしまいます。

幼児期から子どもが問いをもち、質問をするようにしていくことも大事です。ただ言われたことをやるのとは違い、自ら問いをもって始めた行動は深い興味・関心が伴うからです。そのように追求する力を育てることで、その後の学びに対する姿勢は大きく変わってきます。

「子ども自身が考えられるように促す」保護者の子どもほど、「学びに向かう力」が高い

図4-1 物事をあきらめずに、挑戦することができる (年長児)

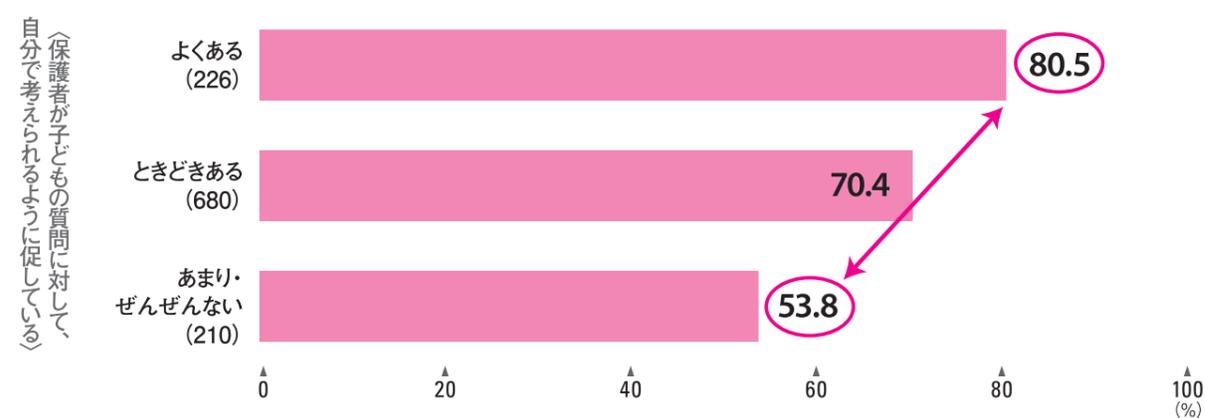
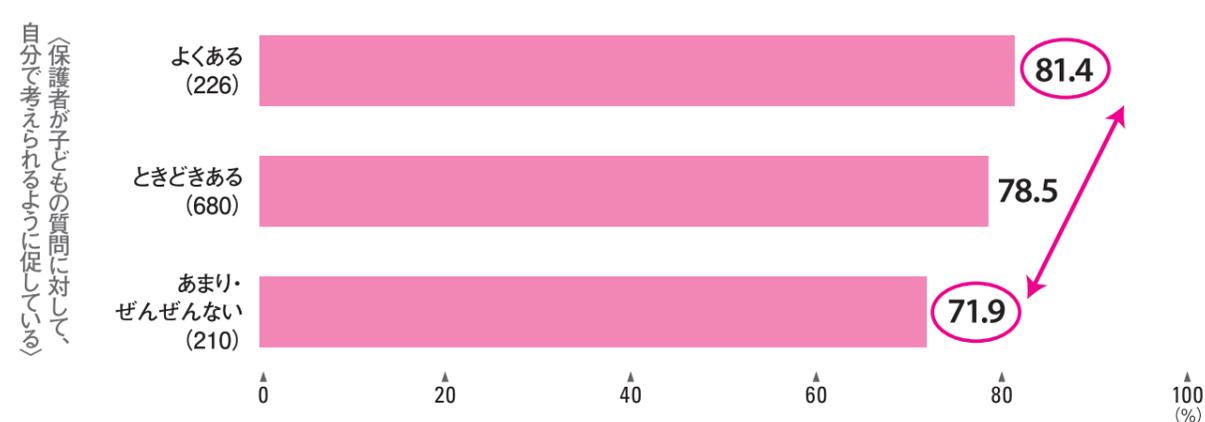


図4-2 人の話が終わるまで静かに聞ける (年長児)



※1: () 内はサンプル数

★保護者が子どもに対して、自分で考えられるようによく促すほど「物事をあきらめずに挑戦することができる」「人の話が終わるまで静かに聞ける」割合が高い傾向にありました。「自分で

考えられるように促す」というのは、子どもの言葉を受け止めてよい聞き手となり、子ども自身が自信をもって考えられるようにしていくということです。

秋田先生の解説

「子どもの質問に対して、自分で考えられるようにしている」ということは、子どもの能力や可能性を信頼してはできません。子どもを助けるのではなく、いかに力を引き出すかといった保育観や教育観を根底にもっているからこそ、学びに向かう力が育っていくのではないかと思います。

保育者や保護者にとって大切なのは、「先を見通した見守り」です。先の見通しがもてなければ、保育者や保護者は見守ることができず、「不安だからこれも言うておこう」「自分がやってしまった方が早い」などとなってしまいがちです。そうではなく、子どもに主体的に選択できる余地を与えることが、学びに向かう力を育てると思います。

調査概要

調査名称: 幼児期から小学1年生の家庭教育調査
調査対象: 年少児～小学1年生の子どもをもつ母親
有効回答数: 5,016名
調査時期: 2012年1～2月

調査地域: 全国
調査方法: 郵送法 (自記式アンケートを郵送により配布・回収)
調査項目: 子どもの生活時間/子どもの学習のレディネス/母親のかかわり/母親の教育観/園・小学校の満足度など

●今回ご紹介したのはこの調査の一部です。詳しい調査結果はベネッセ次世代育成研究所ホームページをご覧ください。(http://www.benesse.co.jp/jisedaikenn/)